

フリーガーのジュニア時代

- 004 インタビュー ● 我那覇和樹 (元横浜ロイヤルサンダーズ)
- 012 インタビュー ● 西川周作 (元大阪フューニール)

がんばれ！草の根サッカー

- 022 ある市井のジュニアサッカークラブを主宰者の視線
「グラスルーツ」が目指すもの
- 026 ジュニアサッカーの第二線で活躍する6人に聞いた
「草の根のチカラ」
セルジオ越後(サッカー解説者)
小野剛(日本サッカー協会技術委員長)
浜本敏勝(大河FC創業者)
牧田博之(NPO法人清水サッカー協会副会長)
宮川淑人(枚方FC代表)
永井洋一(スポーツジャーナリスト／港北FC)

いま、元気な3つの草の根チーム

- 034 北浦和サッカースポーツ少年団
- 038 小柳小まむし坂サッカークラブ
- 042 尾山台サッカークラブ
- 046 サッカー経験がなくてもできる？
ボランティアコーチの難しさ
- 052 サッカーママ座談会
子どもと一緒に歩みたい！
- 060 サッカー部設立に挑んだ父親と教師の情熱
鎌倉FCの冒険



表紙チーム／尾山台サッカークラブ

ジュニアサッカーを応援しよう！ Vol.4

©KANZEN 2007
本書掲載の写真、イラストレーション、図解および記事の無断転載を禁じます。
Cover Photo ● 木村直哉
Cover Design & Art Director ● エイ・ワイ・アキヒロ

知っておきたい！ 今どきのトレーニング

- 066 サッカートレーニングに魔法のしじははあるのか？
- このチームのトレーニングが面白い！
- 072 ミニクロッソ大野
- 078 ヴィヴァイオ船橋
- 084 橋本SCジュニアエース
- 090 ホンマのストライカーのトレーニング編
インタビュー ● 森山泰行 (FC岐阜)
- 096 守護神と虎取り屋を育てる！
サッカー協会発
育成プロジェクトのいま
- 102 気軽にできる！
効果的トレーニング
なわとび・四股踏み

106 旧東ドイツから日本へ 「コーディネーション」を 現場の指導者に届けたい！

- 100 特別付録DVDの良方
- 112 土屋健二のサッカー教室
- 116 サッカーババのママでいこう！
ジュニアのためのこぼれ話
ESSAYライター 木村直哉 著
- 122 日本全国サッカー協会訪問紀行
- 126 新連載第1弾 あゆむが熱い言葉を！
世界を巡る！
北澤豪のサッカーに込めたメッセージ
- 130 新連載第2弾 科学でサッカーに挑む
浅井武のサッカーサイエンス研究所
- 134 バイオニアたちからのメッセージ
浜本敏勝 (大河FC創業者) 木村直哉 著
- 146 GKのスズメ 加藤啓男
- 150 サッカー小説の多さが読む価値エッセイ
グラウンドで会いましょう くらたみずき
- 153 ジュニア・ジュニアエース
主催大会情報＆スケジュール
- 160 読者の広場 ジュニアサッカー応援団
- 174 読者プレゼント 172 執筆者紹介

Regular & etc...

「サッカーの街」が 作る伝統と未来

古くからサッカーで知られる町、京浜東北線沿いの北浦和地区。多くの少年団が切磋琢磨することにより、現在までの隆盛を築いてきた。その中でも特に名を知られるのが「北浦和サッカー少年団」である。FC東京の監督を務めた倉又新雄（第5期卒、現・FC東京U18監督）や、原宿の日本代表の山田寛幸（第37期卒、現・浦和レッズU18監督）など、優れた選手を輩出している伝説ある少年団であるが、その活動とは……

ジュニア小学生

写真：下村 昌典・北浦和地区



北浦和
草の根サッカー

りしている。「行事に力を入れている」と吉川政房団長も話すように、夏の合宿においては川遊び、クリスマス会では出し物を決めて、本格的なダンス練習をしたりと、サッカー以外の活動にも積極的に取り組んでいる。

その一方、「少年団でもトップレベルの指導を味わせてやりたい」（吉野総監督）と、ナショナルトレセンなどの指導方法も積極的に取り入れている。「多感な世代」と吉野総監督も言う小学校での6年間において、サッカーとサッカー以外の経験のバランスをうまく調整している。

個人を大事にする指導

そんなチームがもう一つ大事にしているコンセプトは、親や地域と密接な関係を持つこと。保護者との連携で言えば「父兄のスポーツ役」と自称する吉川団長を通じて、伝統的に遠征時の昼ご飯には「手作りのおにぎりを親に作ってもらおう」といったサポートをお願いしている。練習や試合では、北浦和サッカー少年団のファンと化した多

いま元気の草の根チーム 北浦和サッカー少年団



少年団を通じてさまざまな経験を

1965年、当時社会人の名門である「浦和キッカーズ」の創設者である田中英次さんが学校体育の一環として指導をスタートさせたのが北浦和サッカー少年団のはじまりであり、歴史は古い。その後、67年に開催された埼玉県体に伴ってスタートしたスポーツ少年団大会の影響を受けてスポーツ少年団として日本体育協会に登録した。最盛期には100名前後の子どもたちで賑わっていたというが、現在は少し落ち着いて、75名程度が所属している。これまで辻合格幸（第9期卒、現・浦和レッズスカウト）、遠沼達也（第17期卒、現・札幌U12監督）など、数多くの有能な人材を40年余りの伝統を積み重ねながらサッカー界へ送り出してきた。

田中さんの後を引き継ぎ、自らも第2期卒団生である吉野弘一総監督によれば、チームのポリシーはサッカー選手を育てることだけではなく、「サッカーを通じていろいろな経験をすること」。たとえば、毎年夏にはチームで沖縄県へのホームステイ研修を行い、沖縄の子どもたちとサッカーをする

がんばれ! 草の根サッカー (北浦和サッカー少年団)



(左) 練習を熱める吉野監督さん。
(右) 団長として少年団をまとめる吉川院長さん。



笑顔で練習を見守るお母さんたち。

く父兄がグラウンドに駆けつける。吉川院長は、自身の子どもが16期卒団で現在はコーチをやっており、孫も少年団に所属し、3代にわたってチームと関わっている。他にも、親子で少年団に所属している人も数多く所属しているのだ。また、近年では近所の北浦和GINZALESS商店会にカップを提供してもらい招待大会も開催するなど、地域コミュニティ作りにも力を尽くしてきた。

一方、指導方針に目を移すと「個人の技術にこだわって指導している(吉野総監督)」ことがチームの特徴。「ボールをどれだけ自由に扱えるか」を最重視し、たとえば、ボールキープに失敗して、失点をして、あえてミス許容するムードを作り、失敗の理由をポジティブに探求することにより改善を図っていくような指導をしている。

さらに、キヤプテンの選出は4年生から8年生までの選手たちによる自主投票を行っている。結果、大人たちスタッフの事前予想とは異なる意外な選手が毎年キヤプテンに選出されているそうだ。「このチームの理想は『キヤプテン選』に出てくるような選手を目指すことです。親君にしても

岬君にしても、素晴らしい選手でしょ」と語るのは吉野総監督。

一例をあげれば、現役U-17日本代表であり、北浦和サッカー少年団の卒団生である山田直輝も、北浦和サッカー少年団時代は「ボールタッチの柔らかいパスの出し手」(村松浩・浦和レッズ強化本部アカデミーセンタ長談)であった。北浦和サッカースポーツ少年団が優秀なサッカー選手を次々と輩出している背景には、個人重視のきめやかな指導が大きな影響を与えていることは間違いない事実である。

夢は街を舞台にした サッカーコミュニティ

では、実際の練習はどうだろうか? 6年生の練習を見せてもらおうと、ウォーミングアップの段階から実に新鮮な指導が行われていた。北浦和サッカー少年団伝統のフットサル体操に始まり、次は輪になって「右」と「左」を違った言葉に置き換えた追いかけっこや短距離ダッシュ。走り幅跳びでメキシコ五輪代表候補にも選出された経歴を持つ出口晴明フィジカルコーチの軽妙な掛け声の下、子どもたちの体は躍動感を見せ



「Realizar un sueño」とはスペインで、夢を叶えようの意味。



北浦和サッカー少年団を経て、現在は浦和レッズユースで活躍している山田直輝選手。

少年サッカー大会においてFC浦和のメンバーとして活躍した小峰洋介君の姿もその中に。大会でも話題をさらった彼の爆発的なタッチ力の秘訣が垣間見えた。

こうしてウォーミングアップに30分以上をたっぷりかけた通称「出口学校」が終わると、次はボールを使った練習に移る。ボールトレーニングで特に目についたのは、子どもたちの練習から学ぼうとする意識の高さ。練習の待ち時間には今行っているトレーニングがいかにうまくできるかについて仲間同士で話し続け、そこから出た疑問をコーチにぶつけていく。それに対し、コーチ陣はヒントを与え、練習と休みのメリハリを付けながら、1対1や2対1、それらを組み合わせたのシュート練習。オウムジャパンで話題になったパスの色毎にタッチ数を表すのパス練習などもしており、3時間余りに及ぶ練習時間はあっという間に過ぎていったのだ。

「少年の指導はマニュアル通りにはいかない」。吉野総監督の持論である。この言葉をそれぞれのコーチたちが理解し、柔軟な練習メニューを組んでいく。そして練習は

する子どもたちとの共同作業によって、やがてひとつのものになるのである。

実は、北浦和少年サッカースポーツ少年団は大きな夢を持っている。それは「北浦和」という街を舞台にしたサッカーコミュニティの実現だ。「アルセンチンの少年団ではお父さんがソーセージやワインを売って少年団の運営資金にしながら、子どもたちのサッカーを応援しているんですよ。将来は北浦和という街の中で、大人から子どもがみんなサッカーをしながら、また、おじいさんやおばあさんがお茶を飲みながら少年たちのプレーを見て話をするような場所を作りたいんです」。吉野総監督は少年のように瞳を輝かせ、そう語っていた。

「どれだけ生活が変わろうと、子どもは素直という根本は変わりませんよ」と吉川院長は言う。子どもたちを育てていくために「がんばること」を今日も教え続ける吉野総監督や吉川院長をはじめとするスタッフたち。彼らの情熱があるから、子どもたちの元気な声はいつまでも、週末の北浦和小学校グラウンドに響き続けることだろう。

サッカーコーチの 難しさ

現在にやると日本サッカーを盛り上げた少年サッカーの存在。中でも非プロサッカーや草の根サッカーの普及は、子どもたちの成長に大きな影響を与えてきた。時代が進むにつれ、役割や責任にも大きな変化が見られるようになってくる。その中でも、この中で取り上げ、そのメカニズムや仕組みについて考えてみたい。

文：鈴木友徳 写真：渡辺直樹、編集部

かんはれ！ 草の根サッカー



「教える」ことの
喜びと難しさ

コーチングの醍醐味。それは選手たちが自分の教えによって変化を起こし、技術や戦術を習得していくことだろう。時に受け入れる子どもたちの側に吸収力の

なおさらである。コーチにとって子どもの成長を体験することや得られる喜びは格別のものである。しかし、子どもたちにとって「教えられる」ことは、巨額に「考える」機会の喪失を意味することや、消滅する世に決して忘れてはならない。

ましてや子どもたちにとって重要なのは自分の勝利ではなく、将来、サッカー選手として、かつ一人の人間として、かに成長を遂げていくのである。そのためには時にはあえて答えを出さず子どもたちに一考えさせる一問一答も必要だ。コーチングは、子どもたちにとっても指導者にとっても十分に注意を払う必要があるということも念頭に置いておきたい。

とはいえ、「コーチング」と呼ばれる小学校年代に刺激を与えれば与えるほど、伸びを示すことも重要である。となるとコーチングや指導方法の質がものずと重要になってくることは間違いない。そこでポイントになるのは、子どもたちがいかに練習の場を円滑にこなすのかということである。